

第 章 芦屋市まち・人・暮らし活性化推進アンケート調査

1. 調査の目的

本調査は、阪神・淡路大震災から10年が経過した本市のまちづくりや生活再建施策を中心とする諸事業を総括・検証し、市民の暮らし、コミュニティ、まちとの関わり方などの市民生活の現状を把握することにより、今後の芦屋市の「まち・人・暮らし」の活性化を目指した復興の総仕上げに生かすことを目的に実施した。

なお、被災の有無に関わらず、震災という出来事の前後における生活様式の変化を見るため転入者にも同様の質問を行っている。

2. 調査結果（概要）

【回答者の属性】

1. 性別
 - ・ 女性の回答者が全体の61.5%を占め、男性の38.3%を大きく上回った。
2. 年齢
 - ・ 60歳代の回答者が最も多く22.9%、70歳代が19.2%、50歳代が19.1%でこれに続いている。
3. 家族構成
 - ・ 「親と子（2世代家族）」が49%、これに「夫婦のみ」の30.5%が続き、あわせて79.5%が核家族であることがわかる。年齢を加えて集約すると夫婦のみは60歳台から急速に増加し、70歳台になると約2割が「自分のみ」の単身世帯になる。
4. 居住地区
 - ・ 年齢別に居住地区を見ると、呉川・竹園・伊勢・浜芦屋・松浜・大東・南宮・浜・西蔵町付近に40歳代が偏って住んでいる。
 - ・ 高齢者の偏りを見ると、六麓荘・岩園町のエリアと、陽光町を含むエリアに60歳以上が多く住み、二極化傾向が認められ、住民異動の少ない地域と災害公営住宅の影響が考えられる。
5. 居住年数
 - ・ 回答者の半数弱（46.8%）が10年未満の居住年数であるが、その内の36.2%は市内転居であり、市外からの転入も神戸市が18.2%、その他の被災地が6.4%となっている。
6. 住宅形式
 - ・ 「持ち家（一戸建て）」が39.6%で最も多く、「持ち家（マンション等）」が33.6%と続いている。

芦屋市では再転入者を補足出来ないため、被災したAさんの軌跡は追えていない。他の研究機関や様々な資料からひも解くか、もしくは当時の住民票からの追跡調査が必要と考える。このアンケートをきっかけにして、そういった細かいデータが集積されて今後に生かすことが出来るように期待する。

懇話会からの一言

【震災からの復興について】

問7．被災の程度

- ・ 全半壊に一部損壊を加えると75.7%となり、回答者の4人に3人は何らかの被害を受けている。

問8．震災時の住宅形式

- ・ 震災当時の戸建持ち家世帯の内、現在も戸建持ち家である割合は79.2%であるが、問16の「震災後の気持ちの変化」において寄せられた回答と全体の傾向はほぼ一致している。ただし、年齢を加えると再建資金の問題が加味されるのか傾向は変化する。

問9．震災復興事業

- ・ 全体の傾向としては60・70歳代の高齢層ほど事業に対する関心が高く、若い世代へとくだらかに低下している。（震災当時は50・60歳台であることに留意）

問10．復興事業の評価

- ・ 事業実施については、「必要であった」と「活力を感じている」が1位、2位を占め一見すると評価が高く感じるが、その反面、「コミュニティが失われた」、「住民に配慮」が3位、5位と批判的な意見も少なくない。
- ・ 実施地区に限定すれば、特に「コミュニティが失われたこと」に対する評価が厳しい。

問11．復興状況（項目別第1位、 わからないを除く）

- (1) 住宅の再建状況
 - ・ 震災前より良くなっている(36.6%)
- (2) 商店街のにぎわい
 - ・ あまり戻っていない(23.6%)
- (3) 駅前商業地の活気
 - ・ 震災前と変わらない(27.5%)
- (4) 違法駐車やゴミ出しマナー
 - ・ 震災前と変わらない(37.0%)
- (5) コミュニティのつながり
 - ・ わからない(34.6%)

類似調査との比較 (資料 3 P25)

- 問11 - (1) 住宅の再建状況では・・・
- (ア)神戸市の「震災前より良くなっている」(21.8%)を芦屋市(38.0%)が大きく上回っているが、一方、「震災による影響はなかった」が神戸市では16.7%、芦屋市が4.3%であることからのわかるように、市域に占める被災割合の違いがあり一概には判断できない。
 - (2) 商店街のにぎわいでは・・・
 - (イ)「震災前と変わらない」が芦屋市7.8%、神戸市7.9%とほぼ同率だが、「震災前より良くなっている」では芦屋市の24.4%が神戸市の20.1%を上回った。
 - (3) 駅前商業地の活気では・・・
 - (ウ)この項目で特徴的なことは、「あまり戻ってきていない」が芦屋市では12.0%に止まっているが、神戸市では32.5%となっているところに住都と、商都の違いを垣間見ることが出来る。
 - (4) 違法駐車やゴミ出しマナー
 - (エ)芦屋市では「震災前と変わらない」に38.8%が集中、神戸市では「マナーが戻っていない」に32.5%がそれぞれ集中している。

【あなたの暮らし向き】

問12．暮らしの変化

- ・ 「同じようなもの」との回答が41.9%と大勢を占め、これに「やや低下している」の20.0%、「低下している」の15.4%が続き、全体として低下傾向を示している。
- ・ 年齢別では60歳代に低下意識がやや高い。

問13．低下の要因

- ・ 「震災と景気の両方」が31.4%と最も多く、震災よりもむしろ「不況の影響」が28%で続く、震災から10年を経た今日「震災の影響」そのものは9.7%に止まっている。
- ・ 年齢別では、40歳代で「不況の影響」が50.0%と高く、60歳代では「病気や怪我、退職などの個人的要因」が34.8%と最も高くなっていることが特徴的である。

問14．満足度（各項目第1位、2位）

（1）毎日の暮らし

- ・ やや満足している（35.2%）
- ・ 満足している（21.7%）

（2）自分の健康

- ・ やや満足している（30.9%）
- ・ やや不満（21.1%）

（3）人間関係

- ・ やや満足している（30.9%）
- ・ どちらでもない（29.1%）

（4）家庭

- ・ やや満足している（32.5%）
- ・ 満足している（31.4%）

（5）所得・収入

- ・ 不満である（24.4%）
- ・ やや不満である（20.7%）

（6）将来のたくわえ

- ・ 不満である（36.4%）
- ・ やや不満である（21.3%）

年代別集計・家族構成別集計、その他は資料3 P29 参照

問15．就労状況

- ・ 「主に仕事をしていた」男性が61.4%、女性が23.6%となっている。
- ・ 年齢別の就労状況は20歳代の64.4%から漸減傾向で60歳代の29.0%までなだらかに低下しているが、30歳代でいったん低下した就労状況が40歳代で増加しているのは女性の再就職と思われる。

年代別集計、その他は資料3 P33 参照

類似調査との比較（資料3 P32）

問14

- (オ) (1) 毎日の暮らし～(4) 家庭生活の4項目において「満足している」割合が神戸市を上回っているが、前述のとおり市の性格が異なる（住都と商都）ことに留意しなければならない。

【震災後の考え方や行動の変化】

問16. 住宅に対する考え方の変化（はい・いいえのみ抽出）

- (1) 持ち家より借家が良いと思うようになった。
 - ・ はい(17.2%)
 - ・ いいえ(43.2%)
- (2) 市営や県営住宅に住みたいと思うようになった。
 - ・ はい(14.2%)
 - ・ いいえ(62.2%)
- (3) 住宅や土地の資産性に疑問を持つようになった。
 - ・ はい(39.7%)
 - ・ いいえ(19.4%)
- (4) 戸建住宅が良いと思うようになった。
 - ・ はい(25.7%)
 - ・ いいえ(26.5%)
- (5) 集合住宅が良いと思うようになった。
 - ・ はい(14.9%)
 - ・ いいえ(42.6%)
- (6) 高齢者等の利用に配慮した住宅・設備への関心が高くなった。
 - ・ はい(65.9%)
 - ・ いいえ(7.3%)
- (7) 住宅や住環境の安全性について注意するようになった。
 - ・ はい(83.5%)
 - ・ いいえ(1.9%)
- (8) 多少高くとも耐震性の高い住宅に住みたくなった。
 - ・ はい(70.3%)
 - ・ いいえ(5.8%)
- (9) 近所づきあいが大切だと思うようになった。
 - ・ はい(59.3%)
 - ・ いいえ(3.1%)
- (10) 親と子は身近に住むのが良いと思うようになった。
 - ・ はい(51.7%)
 - ・ いいえ(10.8%)
- (11) 都市にすむより、自然が豊かな農山村地域での生活がしたくなった。
 - ・ はい(16.3%)
 - ・ いいえ(47.8%)

その他、年齢別・家族構成別・現在の住戸形式別集計は資料3 P36 参照

問17. 人間関係に対する考え方の変化

- ・ 「変化はない」が58.5%と大勢を占めたが、「良好になった」(16.0%)と「一時良好になったがもとに戻った」(17.3%)があわせて33.3%を占めていることから助け合いや支えあいの文化の萌しが合ったことは推定できる。

その他、年齢別・家族構成別集計は資料3 P47 参照

問18. 地域活動への関わり方の変化

- ・ 「変化はない」が7割(69.6%)と大勢を占めたが、「関わりが強まった」(12.5%)、「一時強まったがもとに戻った」(11.5%)に回答が集まっていることに、前問同様の文化の萌しが感じられる。

その他、年齢別・家族構成別集計は資料3 P48 参照

次頁に続く

問19. 自らの行動の変化

- ・ 「将来に対する備えを十分にすべきだと思うようになった」(55.0%)、「隣近所との結びつきを大切に思うようになった」(50.1%)が過半数に達している。
- ・ 「地域みんなが困っていることは、みんなで考えて解決する」(40.5%)との回答には新たなコミュニティ文化への息吹を感じる。
- ・ 一方「ものに対する執着心を持たなくなった」(36.5%)がそれに続く。

問20. まちづくりについて

○まちづくりのテーマ

- ・ 「公共施設の整備や住宅、住環境整備などのハード面重視」が38.9%、「施設の使い方やまちの景観形成ルールづくりなどのソフト面重視」が35.6%と拮抗している。

○まちづくりの進め方

- ・ 「地域の団体が主導して、行政と協働して進める」が43.5%で、「行政主導で、住民の意見を聞きながら進める」の39.1%を4.4ポイント上回った。これからの協働と参画の方向性を指し示している。

問21. 地域活動への参加状況(各項目第1位、第2位)

(1) まつり・スポーツ等の交流イベント

- ・ 参加したいが時間がなくて参加していない(28.3%)
- ・ 機会がないし、知らない(24.2%)

(2) ひとり暮らしのお年寄りのみ守りなどの福祉活動

- ・ 機会がないし、知らない(45.6%)
- ・ 参加したいが時間がなくて参加していない(31.8%)

(3) 防災訓練などの地域活動

- ・ 機会がないし、知らない(44.1%)
- ・ 参加したいが時間がなくて参加していない(26.5%)

(4) 青少年育成や子育てに関する支援活動

- ・ 機会がないし、知らない(47.4%)
- ・ 参加したいが時間がなくて参加していない(25.4%)

(5) リサイクルバザーやまちの美化運動など

- ・ 機会がないし、知らない(37.6%)
- ・ 参加したいが時間がなくて参加していない(31.6%)

なお、「参加する気がない」の割合が一番高かったのがまつり・スポーツ等の交流イベントでした(23.0%)

その他、年齢別・家族構成別集計は資料 3 P59 参照

類似調査との比較 (資料 3 P61)

平成15年に実施された神戸市の集計結果と「積極的に参加している」の比較を行いました。
問21 -

- (1) まつり・スポーツ等の交流イベントについては、芦屋市15.7%、神戸市12.6%でした。
- (2) ひとり暮らしのお年寄りに対する見守りなどの福祉活動については、芦屋市4.9%、神戸市4.3%でした。
- (3) 防災訓練への参加では、芦屋市7.6%、神戸市5.1%でした。
- (4) 青少年育成や子育て支援については、芦屋市6.3%、神戸市5.3%でした。
- (5) リサイクルバザーやまちの美化運動などへの参加では、芦屋市が10.3%で、神戸市の14.4%を下回っています。

【安全で安心なまちづくり】

問22. 防災・防犯面で不安なこと

- ・ 「ふたたび大地震が発生しないかということ」に最も多い67.1%の方が回答を寄せられ地震に対する恐怖は依然として拭いきれていない。
- ・ 「付近の道路や公園が暗く、見とおしが悪く死角が多いため、放火や引ったくりの心配」が42.9%で2位につけており、日常生活面での不安を浮き彫りにしている。
- ・ 第3位には、「火事や急病の時に消防車や救急車が直ぐに着てくれるのかということ」が36.6%で続く。消防救急体制や輸送経路(道路整備等)に対する不安が感じられる。
- ・ 以下、「災害時等に備えた住民組織がないこと」(29.1%)、「近くに頼れる人がなく、人とのつながりが薄いこと」(26.9%)が続き、地域コミュニティの不存在が指摘されている。

年代別集計・家族構成別・地区別集計、その他は資料3 P65 参照

問23. 災害時に出来るようなこと

- ・ 「避難所で救援物資の仕分けや配布を行う」が52.1%で過半数を占め、「逃げ遅れた人を助けたり、初期消火活動を行う」(42.8%)、「地域の高齢者や病人などの世話をする」(31.5%)、「地域で炊き出しを行う」(30.6%)が続く。
- ・ 年齢別の20歳代(21.8%)、40歳代(25.1%)に「自分の専門知識を生かして活動する」が高いのが特徴的。

問24. あなたにできる地域での取り組み(ベスト5)

- 「家庭の門灯を点灯するなど道路を明るくする」(45.2%)
- 「地域の危険箇所を調べる」(35.9%)
- 「防災・防犯に関する知識や情報を地域で共有する」(35.9%)
- 「地域での活動を通して、住民同士のつながりを深める」(34.9%)
- 「災害に備えて救助器具や水・食糧を備蓄する」(32.0%)

問25. 防災施設の周知

- ・ 防災倉庫などの地域防災施設については、「場所も使い方の知らない」の69.8%と「知っているが、鍵の所在など使い方はわからない」の23.4%をあわせて93.2%の人が直ぐに利用できない実態が明らかになった。
- ・ 一方で「知っており、直ぐに使うことが出来る」(4.2%)の存在もあり、今後の取り組みが重要である。

問26. 芦屋市に求める施策(ベスト10)

- 危機管理・防災対策の充実(48.0%)
- 高齢者のための施策(42.9%)
- 環境問題への取り組み(37.1%)
- 学校教育(35.2%)
- 路上駐車など自動車への規制(33.1%)
- 景観に配慮したまちづくり(25.3%)
- 保育所など、次世代のための施策(20.8%)
- まちの緑化や公園整備(17.9%)
- 生涯学習の振興(16.9%)
- 交通安全対策(16.8%)、文化・芸術の振興(16.8%)

以上、より詳しい内容が資料 3に記載されていますのでご参照ください。

第 章 震災復興10年・市民ワークショップ

1. 市民ワークショップの目的

震災、そして復旧・復興の10年の道のりを振り返ることにより、今後の芦屋のまち・人・暮らしが活力にあふれ、さらに発展していくことを目的として、公募市民や団体推薦市民、公募職員等が一同に会してワークショップ手法による意見交換を行なうなかから、市民の視点で震災や復興を捉え直すことにより、それぞれの思いを共有するとともに、復興過程のなかから得た市民防災や市民参画、協働のあり方等々を検証し、そこから得た教訓が今後5年、10年の行政運営に資することが出来るように「市民ワークショップ」を開催した。

ワークショップは、行政が誘導することのないよう第三者をコーディネーター・ファシリテーターとして起用し、今後の市民と行政との役割分担や、取り組みの優先順位（プライオリティ）などについて活発な意見交換が行なえる環境づくりに努めることにより、今後の協働と参画の礎とするとともに、今後の施策（芦屋市総合計画等）に反映していく基礎資料として集積した。

2. 市民ワークショップの進め方

山手中学校区・精道中学校区・潮見中学校区を各ブロックとする市内3ブロックにおいて第1回のワークショップ「あなたにとっての震災復興とは」をそれぞれ開催し、より活発な意見がしやすい環境を創出するとともに、地区ごとの被災体験の違いを検証しつつ、そこで得たそれぞれの体験や教訓、そして問題点を浮き彫りにする。

各中学校区ごとにショップを開催した後、10年の振り返りから得た様々な教訓を今後の芦屋の「～まち・人・暮らしの活性化に向けて・将来に生かしていくべきこと～」と題した全体会を開催した。

日時	会場	参加人数	内 容
2004年8月21日（土） 9：30～11：30	芦屋市分庁舎 大会議室	20人	あなたにとっての震災復興とは （校区别）
2004年8月21日（土） 14：00～16：00	芦屋市分庁舎 大会議室	26人	
2004年8月28日（土） 9：30～11：30	芦屋市分庁舎 中会議室	15人	
2004年9月11日 14：00～16：30	市民センター 401号室	20人	～まち・人・暮らしの活性化に向けて、将来に生かしていくべきこと～ （全体会）

3. 市民ワークショップのまとめ

(1) 地区(校区)別ワークショップ

すべての中学校区で「暮らし」・「コミュニティ」・「防災意識」に関する意見が一番多く出された。

震災直後の人のつながりやコミュニティの大切さを実感したが、現在は地域のつながりが薄くなっていると感じている人が多い。

同様に、震災で防災意識が高まったという意見と、現在は防災意識が低下している等両面の意見が出されている。

防災倉庫に対する関心(もっと活用しよう)が高まったという意見や防災訓練に対する意識や自主防災に関する活動が始まったという意見が各中学校区で出されている。

地域活動への関心や参加意識、また、役員の固定・高齢化など地域組織の抱える課題などに対する関心が高く、それらに対するそれぞれの地区で始まった新たな動きやアイデアがそれぞれの地区で出されている。

高齢者の増加に伴い、福祉や医療に関する意見は各中学校区で出されている。

各中学校区に共通して、商店街等の賑わいがなくなっているという意見が見られた。

住まいやまちなみの変化に関する意見は、区画整理や再開発が行なわれた精道中学校区に多く見られた。

古いお屋敷や屋敷林など芦屋らしいまちなみがなくなったという意見は各地区で見られた。

マンション問題は、まちなみの変化と新住民の増加といった地域コミュニケーションの両面があげられている。

まちの緑が減ったという意見の一方で、花を飾る家が増えたという意見も見られた。

各中学校区で出された意見を、「暮らし・コミュニティ・防災意識」、「健康・福祉・医療」、「住まいとまちなみ」、「にぎわい(商業)・文化」の各テーマごとに整理すると資料 4-P5以降に詳しく記載している。



(2) 全体ワークショップ

「暮らし」・「コミュニティ」・「防災意識」において、地域の人のつながりをどう創っていくかが、各グループ共通の関心事であった。

そのなかでも、若い世代の地域活動への参加や世代間交流が共通した悩みとして多く出された。

そのキッカケとして、公園を人のつながりやコミュニティを創っていくきっかけにしてはどうかという意見が、共通して出された。

その他、子供を通してという視点から、学校や子ども会を核にして人のつながりを創ってはどうかという意見が多く出された。

防災活動を通じたコミュニティづくりとして、防災倉庫の活用が各グループから提案されている。

マンション、その中でも特にワンルームマンションの増加が地域におけるコミュニティ形成に影響を与えているという意見が多く出ている。

「まちなみ」においても、マンションの増加が挙げられており、そのなかで、マンション周辺の緑化に関する提案があった。

大きなお屋敷など芦屋らしいまちなみがマンションに変わってしまった中で、低層住宅と調和の取れた住環境づくりやまちなみに代わる文化を残せないかと言う提案が出された。

にぎわい創りの工夫として、個人商店が連携して宅配サービスの組織の結成や地域マネーなどの活用が挙げられている。

震災の経験を“伝える”、“発信する”ことが大切である。

その他、財政難を市民と一緒に乗り越えるために市民参画の市政の必要性も指摘されている。

全体ワークショップで出された意見の詳細は資料 4-P21 以降に記載している。

10年を振り返って、総括したり検証する意見を述べることは非常に大切であると同時に、意外と簡単である。難しいのは、その意見の数々を今後どう活かしていくのかということ、まさしく行政との協働と参画の責任が生じる。

懇話会から一言

住民の意向をくみ上げる手法としてのワークショップは有効である。今後は意見を問題に、問題を課題に持ち上げる工夫を重ねて市政の改善につなげて欲しい。

懇話会から一言

参加する行政から、創りあげる行政へのワンステップになる可能性がショップにはある。そこで出た意見を大切に！！

懇話会から一言

以上、より詳しい内容が資料 4に記載されていますので、ご参照ください。

